

エリバン要塞 - イレバンの破壊された歴史的な中心部

2020 年の秋、44 日間にわたる華麗な軍事作戦により、カラバフのアゼルバイジャン占領地域が解放されました。これに伴い、アゼルバイジャンはイランとアルメニアとの国境を完全に支配下にしました。1990 年代初頭にアルメニアの占領者によって追放されたすべての国内避難民が戻るカラバフのインフラと居住地の復旧が始まりました。さらに、公式バクーは、先住民であるアゼルバイジャン人が 1980 年代後半に強制的に追放された場所から、将来、アゼルバイジャン人をザンゲズールおよびアルメニアの他の地域に戻す計画を発表しました。この点で、アゼルバイジャンでアルメニアが破壊された中世のアゼルバイジャンの文化的、建築的、歴史的遺産を研究することの関連性が高まっています。特に重要なのは、現在完全に破壊されて



イレヴァン州の民族地図。1886年 E.コンドラテンコ編

いる中世のアゼルバイジャンの都市イレヴァン(エリバン)の悲劇的な運命の研究であり、現在のアルメニアの首都エレバンがその場所に現れました。ヨーロッパ、ロシア、オスマン、アルメニアの数多くの情報源に基づいて、イレヴァンの運命を正確にたどることができます。1960年代にアルメニア当局によってこの都市が破壊された後、28世紀前とされる古代エレブニについての神話がでっち上げられ、イレヴァンの近くで発見されたウラルティア要塞の遺跡が証拠として使用されました。国際社会と科学は、目に余る破壊行為を隠蔽するために設計されたこの歴史の改ざんに無関心であってはなりません。

イラバン市の一部。19世紀末の写真。ここに描かれている建造物はすべて取り壊されており、アゼルバイジャンの街の歴史を物語っています。



前書き

イレヴァンは「ローマよりも古い」古代アルメニアの都市であり、アゼルバイジャンおよびアゼルバイジャンの文化的、歴史的、建築的遺産とは何の関係もないとアルメニアのプロパガンダと疑似科学は、証明するために長年努力してきました。しかし、すべての真面目な歴史家は、中世において、現在のアルメニアの領土はチュクルサード地域の一部であったことを知っています。最終的に、チュクルサード地域はサファヴィー朝のアゼルバイジャン州の4つのベイレルベク(県)の1つになりました。1504年、サファヴィー朝のシャーイスマーイールは、彼の指揮官であるレバングルカーンに、チュクルサードに要塞を建設するよう命じまし、1511年に建てられ、創設者のレヴァンにちなんで名付けられました。時が経つ

につれて、名前は「Iravan」と発音されるようになりました。Turkic言語では、母音「i」が最初の子音の前に発音されることが多いためです。イラヴァンはイスラム教徒の東部でミナレットの街として有名になりました。要塞には8つのモスク、800軒の家があり、そこにはアゼルバイジャン人だけが住んでいました。

アルメニアの改ざんの実際

アルメニアでは、イレヴァンの歴史についての真実を隠そうとあらゆる方法で試みています。それで、2014年5月、アルメニア当局は「古代ローマの首都」と言う映画を発表しました。彼らは都市の中世の建築と歴史的遺産の破壊とその歴史のアルメニア化においてアゼルバイジャンの十分に根拠のある告発に答えようとしています。この映画は、ほぼ2800

1766年に建てられたブルーモスク。19世紀末の写真



年前と推定されるイラヴァンの古さについて多くのことを詳しく語っていますが、議論として14世紀のムスリムチュルク系支配者の2枚の硬貨のみが提示されています。視聴者に映画で登場するコインはエレバンで鑄造されたと言われていますが、実際にはそうではありません。このように、14世紀のクラギッド支配者アヌシルヴァン(アヌシロヴァン)のコインを研究すると、鑄造の場所はイレヴァンではなく、現在のイランの領土にあるマリヴァンの街であることがわかりました。この映画では、また、同じくエレバンで鑄造されたとされる支配者アブ・サイードのコインを簡単に示していますが、鑄造の場所として、やはり現在のイランの領土にあるロヤン市が示されています。さらに、情報源は、都市としてのイレヴァン(レヴァン)が16世紀初頭に設立され、その後要塞に造幣局が建てられたことを明確に示しています。これは、外国の科学者や貨幣学者

のコレクションの多数の研究によって確認されています。その結果、クラギッドは、14世紀には存在しなかった都市レヴァンで硬貨を鑄造することができませんでした。そして、アルメニアのメディアが公開した資料によると、イレヴァンでは、16世紀以降、サファヴィー朝の下で、後にイラヴァンのカーンの下で、コインが鑄造され始めました。同時に指摘されるのは、街の歴史的な中心部にあって、造幣局がカーンの宮殿の領土にあったが、現在は完全に破壊されています。アルメニアのプロパガンダがアゼルバイジャンの支配者の硬貨を偽造するのが初めてではありません。1960年代にさかのぼると、ソ連の学者B. ピオトロフスキーは、アルメニア人作家S. アイヴァジヤンの改ざん、12~13世紀のアゼルバイジャンのイルデジジドの硬貨の上の碑文を逆に読んで、紀元前17世紀には「アルメニア・ハヤス」コインとして流通させたことについて憤慨して書いていました。

イレワン(エリバン) - アゼルバイジャン市

19世紀の有名なフランス白人学者A.J. セント・マーチンは次のように指摘していました：「...おそらくレヴァンであるアゼルバイジャンの地域の1つに付けられたロヴァンという名前は、イスラム教徒によって付けられて、エリバンはアルメニアの一部であって、彼らの支配下では常にアゼルバイジャンの一部であった首都です」。

19世紀の有名なアルメニアの教育者および作家Khachatur Abovyanは、「エリバン市の簡単な歴史的概要」という記事で13世紀が始まる前のアルメニアの作家が「エリバン市については言及されておらず、1209年以降、彼らはそれを「場所」と呼んでいたと書いています。ノアがアララトの地の頂上から現在の街を見てエリバンと名づけたという伝説を完全なフィクションと呼び、Kh. Abovyanは、「おそらく、この都市は1441年にペルシャ人がジャハーン・シャー(アゼルバイジャン

19世紀末の写真。モスクはイラヴァンの武装化の際に取り壊された



のカラ・コユル州の支配者ジャハーン・シャー(R.G.))時代に所有して以来知られていました」と付け加えました[5]。このように、K. Abovyan のようなアルメニアの歴史と文化の専門家でさえ、イレバンの設立の具体的な時期を特定するのは困難でして、これはアゼルバイジャンのチュルク系の支配者の下で起こったと推測していました。

別の信頼できる情報源は、有名な中世のオスマン帝国の旅行者で地理学者のエヴリヤ・セレビはこの場所に小さな集落が出現したのは 15 世紀初頭であると考えられていました。彼によると、ヒジュラの810年(1407～1408年)、エミール ティムールの寵児の 1 人であった商人のホージャ カーン レキチャニがこの地に足を踏み入れました。地域の肥沃さに惹かれ、彼は家族と共にここに定住し、

彼は日々、米を育て豊かになって、都市を建設しました。E. チェレビはまた、ヒジュラの915年(1509～1510年)シャー・イスマイル・サファヴィーがこの場所に要塞を建設するために彼の宰相レバングル・カーンに命じて、彼は7年でそれを行い、新しい要塞をレヴァンと名付けました。

イレヴァンがその名前を得て、サファヴィー朝の下で要塞都市になったという事実は、ロシアと旧ソ連の著名な歴史家で東洋学者のV.V. バルトルドによって確認されました:「エリバンはティムール[14世紀の終わり]の下の入植地として生まれ、そして、16世紀になってシャー・イスマイルの下で、初めて都市になり、その後、現在の名前になりました」

1673年にイラヴァンを通じたフランス人旅行者ジャン・シャルダンは、イレヴァンの要塞

19世紀末の写真。ここに描かれているイラヴァン市のエリアは完全に取り壊されました



とカーンの宮殿について詳しく語っています。彼は、800戸の家屋があった要塞は小さな町の規模を超えており、そこにサファヴィー朝これによる意味一言で言えば、シーア派のチュルク系人口ですが住んでいると述べています。

一部のアルメニア人研究者は、外国人旅行者の中世のメモを参照して、イレヴァン要塞に多数の先住民のアルメニア人が存在することを証明しようとしています。実際、情報源は、日常の仕事や貿易のために要塞にやってきたアルメニア人について語っています。アルメニア人作家イェルヴァンド・シャハジズは著書「オールド・イエレヴァン」の中で、イスラム教徒のチュルク人が要塞に住んでいたのに対し、アルメニア人はここに商店しか所有しておらず、夕方には施錠して家に帰ったと述べています。

多くの情報源は、イラヴァンがアゼルバイジャンにあることを示しています。特に、18世紀にロシア軍事顧問のジョージア人のS.ブルナシェフは、「...アゼルバイジャンのエリバンとガンジャ都市...」について書いています。さら

に、1808年にイレヴァンを襲撃しようとして失敗したロシアの司令官I.V.グドヴィッチ將軍の報告によるとこの都市はアゼルバイジャンとしても特徴付けられています。「...アデルベイジャン全体、特にエリバン地域で...」

実際にはペルシャのシャーに従わなかったイラヴァン・カーンの高い地位は、カーンとロシアの最高的高官との直接の通信によって証明されています。特に、皇后エリザベス・ペトロヴナの秘書、首相M.I.ボロツォフの彼へのアピール:「エリバン地方の最も崇高で高位の支配者、メグメド・カーン、私の誠実な友人です!」

イレヴァンのハーンは帝政ロシアと直接交渉することが多く、彼らが発行した法的文書は長い間重要性を保っていました。これは、ハン国に住んでいたアルメニア人がロシア側に渡り、彼らは、イレヴァンの支配者からアゼルバイジャン語で書かれた法令やその他の書類を保管し、これらの書類を打ち負かして、所有していた土地と利益を保護しようとした。ロシアのアーカイブは、18世紀半ばに一部のアルメニア人に発行された、イレヴァン・ハ

ーンの布告が保存されています。

旧ソ連の歴史家N. ボグダノフは「最後のイレヴァン・カーンであるサルダル・フセイン・カーンは、アゼルバイジャンのカージャールの遊牧民部族の出身であり、イランで統治していた王朝と関係があり、彼がハーン国を与えられる前は、エレバンの国境司令官でした。ロシア軍の侵攻の瞬間まで、彼は 22 年間完全に独立してハン国を統治し、名目上はイランに依存しているだけでした。」と書いてます。

イレヴァン要塞の漸進的破壊

イレヴァンの要塞は、ロシア軍による攻撃の後も良好な状態を維持しており、信頼できる要塞であり、ロシアの軍事専門家は要塞について「要塞(エリバン)は...丸い塔のある二重の石の壁に囲まれています。要塞の堤防側のほぼ半分を占める、古くて非常に優れた建物であるエリバンサルダールの鑄造所と宮殿。」と書いていました。

しかし、次の世紀にわたって、要塞はアルメニア人によって徐々に破壊され始め、アルメニアがソ連化後、このイレヴァンの歴史的な中心部は完全に破壊されました。要塞の大規模な破壊は、1920 年代から 1930 年代にかけて、ソビエト アルメニア当局が古い建物を取り壊すキャンペーンを開始したときに始まりました。そして、アルメニアの首都の開発のための新しいマスタープランが実施され始めた 1950 年から 60 年にかけて、歴史的な中心部の保存を提供しないで、要塞と首都の歴史的な中心部全体が完全に破壊されました。ご存知のように、文明世界全体では、都市の歴史的な中心部の保護に特別な注意を払うのが通例ですが、これは人々の歴史的および文化的遺産を尊重する最初の兆候です。しかし、アルメニアでは、明らかに、この問題について独自の意見を持っています。

アルメニア当局が、宗教の残党と戦うためのソ連当局のキャンペーンで、イレヴァンの要塞、モスク、その他の建物の破壊を帳消しに

しようとする現在の試みは、軽薄に見える。実際は、イレヴァンでは、ソ連時代にはしばしば破壊された宗教的な寺院だけでなく、宗教とは何の関係もない建物の複合体全体が破壊されました。一般に、歴史的建造物と都市センターの国家保護システムがソ連で確立され：結局のところ、モスクワのクレムリン、バクーのイチェリ・シェヘル(要塞)、トビリシのナリカラ、デルベントのナリン・ガラ要塞などを取り壊すなどということは誰にも思い浮かばなかったです。イレヴァンでは、現在のアルメニアの首都のアゼルバイジャンのイスラム教徒の過去を思い出させたという理由だけで、歴史的な中心部が破壊されました。アルメニア当局によるこの露骨な破壊行為は、イレヴァンとアルメニアの真の歴史を将来の世代から隠すことを目的としています。この結論は、アルメニアのメディアで古いイランに関する一連の記事を発表したロシアの建築家アンドレイ・イワノフの見解によって支持されています。特



に、著者は、1924 年に承認された基本計画が旧市街の保存を提供しませんでした。この計画は、アルメニアの建築家 A.O. タマニャンによって準備され、A. イワノフは「...結局のところ、タマニャンは別のベクトル：都市の古い物質的物質の無慈悲な破壊を定めました。すべての計画の繊細さにより、1924年の計画にあるほとんどすべての建物は新しく、定期的で、四半期ごとです（例外はいくつかの教会とモスクです）」と書いています。同じA.イワノフは、他のロシアの科学者、N. と D. ザミヤチンによると、すべての伝統的な標識と前兆、固定観念と記号などの廃止の研究に言及し

て、「今日、新しいエレバンを発明したタマニャンが、「場所を破壊する」という戦略の枠組みの中で古いエレバンに関連して行動したことは明らかです。」と書いています。

国際建築アカデミー (IAAM) の対応するメンバーであるカレン・バリヤン教授は、アルメニアのメディアで古いイラバンの完全な破壊のプロセスについて同様に厳しく話しました。彼の意見では、ソ連時代には、アルメニアの建築家の銀河全体が、イレヴァンの中世の建物の破壊で「競争」しました。アルメニアの科学者は、首都の都市計画における現在の状況をさらに嘆かわしいと考えています。少

し前に、都市の「歴史的な中心部」を作成するプロジェクト(?)がエレバン市の奥深くから出現したことに注意したいです。このように、アルメニア当局は、首都の本当の歴史的な中心部である前世紀のイレヴァン要塞を徐々に破壊し、新しい「古いエレバン」を作成することを決定しました！このプロジェクトに関して、K. バリヤン教授は「もちろん、これは偽物です。現実主義者になろう、本物の建築の生き残ったわずかな部分（本質的にはリメイク）から圧縮された、共通の屋根で覆われていますが、エレバンの中庭の上には常に開いた空がありましたが、これらすべてが屋根の下で博物館に変わります。それは歴史的に確立された環境ではなく、1つの全巻の形での模倣です...古いエレバンを救う方法はわかりませんが、必ずそうなるでしょう。」と述べています。

多くの学者や広報担当者は、イレヴァンの悪名高い再建の目的は、まず第一に、街の古



エレバン。サルダロフ・モスク

エリバン。サルダロフ・モスク、中庭からの眺め



い中世の建築群の破壊であると明確に主張しています。ソ連の下で、数十年にわたり、アルメニア当局は首都の中心部にある古い建物のほとんどを取り壊し、その場所に近代的な都市ブロックが現れました。

イラヴァンの歴史の改ざん

イレヴァンの古いアゼルバイジャン建築群が破壊された直後に、アルメニアの現在の首都の起源とされている、ウラルトゥの要塞エレブニの伝説が発明され、流布されました。すべては、1950年代にイレヴァン近郊のテイシェバイニで、ソビエトの考古学者がウラルトゥ要塞の遺跡と「RBN」の文字が書かれた楔形文字板を発見したということから始まった。地元科学当局は、この碑文を「エレバン」という名前に等号を付けて「エレブニ」という言葉として解釈することを急ぎました。実際には、まず、楔形文字は、エレブニではなくイルプイニのウラルトゥの要塞に言及していました。そして第二に、すべての真面目な科学者、アルメニア人も含めて、指摘するように、ウラルトゥの言語、文化、歴史はアルメニア人とは何の関

係もありません。さらに、ウラルトゥ州とこれらの地域にウラルトゥ要塞が建設されていた時代、今のアルメニア人の祖先はバルカン半島に住んでいました。アルメニア国家は、ウラルティア国家の崩壊後、何世紀にもわたって形成され始め、また、それから1世紀後アルメニア人が南コーカサスに現れたことでした。

それにもかかわらず、発見された「RBN」の付いた楔形文字は、イラヴァンの歴史とはかけ離れたものであり、テイシェバイニの発掘に参加した人々を含む、著名なソ連および外国の科学者から厳しい批判を引き起こしました。そのような科学者の中で、ソ連の科学アカデミーの学者 I.I. ミンツォー当時ウラルトゥ要塞の発掘現場を訪れたソ連の歴史科学の第一人者でいて、また、ここで発掘した世界的に有名な考古学であり、歴史家、東洋学者であり、B.B. ピオトロフスキー学者もいました。エレブニに関連するイベントに到着したソ連の科学者たちは、アルメニア当局によって本物の古代都市として提示されている、この場所に「ウラルトゥの町」が建設されていることに驚きました。



エリバン。街と般的なビュー。ザンギ

最近エレバンを訪れたロシアのジャーナリスト兼研究者マキシム・パハレンコは、エレブニ・コンプレックスがほとんどすべてがソビエト時代に建てられたからソ連・ウラルトゥスの要塞と適切に呼ばれた。M. パハレンコによると、エレブニ博物館は「遺物のコピーだけでいっぱい」であり、「ソ連時代に再建された要塞」であるため、古代の外観はありません。さらに彼は「...ソ連の演武者がエレブニの壁に特別な印象を加えたと感じています...おそらく、ソ連の修復者は、壁の石の土台を特別に高くして、印象を大きくしました。」と書いていました。

1984年にアヴタグリガット工場の領域にあるイラヴァンで発見された、おそらくウラルト人の墓と霊廟に関して、M. パハレンコは、「外から見ると、この霊廟は純粋にリメイクされているようだ」と書いています。

しかし、それ以来、この偽の要塞は、アルメニアの首都の住民やゲストに、イラヴァンの「

先駆者」である古代の建築記念碑として示され、それについての映画が作られ、本や記事が書かれました。実際、これらすべての小道具は、エリバンの要塞であった都市の真の歴史的中心部と歴史的建造物の破壊の事実を隠すように設計されています。

結論

長い間、外国、帝政ロシア、ソ連の科学は、南コーカサスの歴史的なアゼルバイジャンの土地の話題に、イラン、オスマントルコ、およびこれらの国家とロシアとの対立の歴史の枠組みの中でこの問題を検討したので、あまり注意を払っていませんでした。このアプローチにより、コーカサスの歴史、文化、建築、社会政治プロセスに重大な痕跡を残したエリバン・ハン国を含む、アゼルバイジャンの歴史の重要なページが忘れられました。ソ連の崩壊と独立の回復後、アゼルバイジャンはその歴史的遺産を研究し、誤ったアルメニアの歴史的概

念を明らかにするためのコースを受講しました。

アゼルバイジャン共和国は、コーカサス、小アジア、中近東の領土にさまざまな時代に存在した東、州、およびハン国の偉大な中世帝国の精神的な継承者です。何世紀にもわたって、現在のアルメニア共和国の領土のほぼ全体が、さまざまなアゼルバイジャンとチュルクの州の一部でした。したがって、信頼できる情報源に基づいて、この地域の本当の歴史を国際社会に伝えることは非常に重要です。今日、この問題はアゼルバイジャンの州レベルで優先されています。★

参考文献

1. Çələbi Evliya. Səyahətnamə (Azərbaycan tarixinə aid seçmələr). Hazırlayan Seyidağa Onullahi. Bakı, 1997, s.50
2. Şardən J. Səyahətnamə (Fransız dilindən tərcümə edən V.Aslanov). Bakı, 1994, s. 21
3. Jean-Antoine Saint-Martin. Mémoires historiques et géographiques sur l'Arménie, suivis du texte Armenien de l'histoire des princes Orphélians, 1819, p. 312-315
4. Journal du voyage du chevalier Chardin en Perse et aux Indes orientales par la mer Noire et par la Colchide
5. Абовян Хачатур. Полное собрание сочинений, Т.VIII, Ереван (на армянском языке), 1958, с. 287
6. Бартольд В.В. Сочинения, т. VII. Работы по исторической географии и истории Ирана. М.: Наука, 1971, стр. 212-213
7. Богданов Н. К вопросу о феодальной эксплуатации кочевников в Закавказском крае в первой трети XIX в. // Исторический архив. Т. II. М.-Л. 1939, с. 225
8. Военный энциклопедический лексикон (в 14 томах). Второе исправленное издание под общим руководством М. И. Богдановича. СПб, 1852-1858, Том 14, 1858 г., с. 437
9. Ереван. Урартская крепость и музей Эребуни, <http://maximus101.livejournal.com> – 03.11.2013
10. Замятина Н., Замятин Д. Гений места и город: варианты взаимодействия // Вестник Евразии. 2007. № 1 (35). с. 77
11. Иванов Андрей. Северный проспект ведет в Конд. Этюды о духе места. Часть II, <http://archi.ru> - 19.10.2011
12. «Из истории армянских монет: Во времена персидских правителей чеканились и городские монеты Ирвана (Еревана)», www.panarmenian.net - 18.10.2013
13. «Картина Грузии или описание политического состояния царств Карталинского и Кахетинского, сделанное пребывающим при Его высочестве царе Карталинском и Кахетинском Ираклии Темуразовиче полковником и кавалером Бурнашевым в Тифлисе в 1786 г.», (Издание К.Н. Бегичева, Тифлис, 1896 г.)
14. Отношение гр. Гудовича къ гр. Кочубею, отъ 1-го ноября 1807 года, № 123 // АКАК, том III, с. 235
15. Отношение гр. Гудовича къ товарищу министра иностранныхъ делъ гр. Салтыкову, отъ 11-го января 1809 года, № 7. // АКАК, том III, с. 291; Всеподданнейшее донесение гр. Гудовича, отъ 11-го, декабря 1808 года, № 18.— Амамлы. // АКАК, том III, с. 252
16. Пиотровский Б.Б. «Письмо в редакцию» Историко-филологический журнал 1971, №3, с.302-303
17. Письмо государственного канцлера графа Воронцова к Эриванскому хану, от 21 октября 1802 года // АКАК, том I, с. 549
18. Старый Ереван в новом Ереване, <http://golosarmenii.am> - 18.07.2014
19. Յերվանի Շահազիզ: Հին Յերվանը: Յերվան, 1931 (Ерванд Шахазиз. Старый Ереван. Ереван, 1931, с. 34)